

称号及び氏名	博士(看護学)	岡田 純子
学位授与の日付	令和4年9月23日	
論文名	経験2～3年を有する看護師のクリニカルリーズニング向上支援プログラムの開発	
論文審査委員	主査	志田 京子
	副査	細田 泰子
	副査	簾持 知恵子

## 論文内容の要旨

**【目的】** 経験2～3年を有する看護師を対象としたクリニカルリーズニング向上支援プログラムを開発し、その効果を評価することである。

**【概念枠組み】** クリニカルリーズニングを学ぶプログラムを、文献的考察、Kolb (1984)の経験学習モデルに沿って検討した。

### **【予備研究1】文献検討にもとづくプログラム(案)の作成**

**方法:** 教育プログラム、院内研修、看護師研修をキーワードに、看護師のプログラム開発に関する文献を検索した。データベースは、医学中央雑誌、CiNii Articles、CINAHL with Full Text、CiNii Books、ソースタイプは、学会誌、学術専門誌、書籍とした。

**結果:** 教育方法、評価の考え方が書かれた部分を参考にプログラム(案)を作成した。学習は経験学習サイクルを繰り返すことによって強化されることから、2回の研修とし、変化する状況下で患者を理解し実践できるシミュレーションという手法を用いた。

### **【予備研究2】専門家会議によるプログラム(案)の内容妥当性、実用性、有益性の検討**

**方法:** 院内教育責任者の役割を担った経験を有する看護師、専門看護師として5年以上の経験を有する看護師計5名に対してフォーカスグループディスカッションを行った。研究参加者が配布資料に記載した内容、研究者が観察し記録した内容、ICレコーダーに録音した内容を質的に分析した。

**結果:** シミュレーションシナリオに矛盾はなく有益性が確認できた。実用性と有益性を高めるために、患者の背景や心理・社会的側面の情報を追加し、事前学習内容や当日の役割を具体的に示し、ワークシートの各項目の修正を行った。

### **【予備研究3】パイロットスタディによるプログラム(案)の実行可能性の検証**

**方法:** 近畿圏内の総合病院に勤務する経験2～3年を有する看護師3名にプログラムを実

施し、2回のグループインタビューと4回の効果判定尺度による調査を行った。

**結果**：説明のわかりやすさ、シミュレーションの受けやすさ、クリニカルリーズニングの理解について肯定的な意見が得られた。ワークシートや調査票の記載に時間を要するとの意見があり、記載時間と調査内容を検討した。1回目研修後にクリニカルリーズニングを臨床で実践するよう促す文章をシミュレーションシナリオに記載した。

#### **【本研究】プログラムの開発と効果の評価**

**方法**：近畿圏内の総合病院に勤務する経験2～3年を有する看護師62名をマッチング法にて8～12名のグループにわけ、グループごとに乱数表を用いて介入群とコントロール群に割り付けて実施した。調査票は、クリニカルリーズニングの帰結因子として【看護師の問題解決行動自己評価尺度】、属性因子として【看護実践における行為の振り返り尺度】、【成人用メタ認知尺度】、【ラサター臨床判断ルーブリック】を用いた。また基本属性を調査した。データ収集期間は2021年9月～2022年4月であった。

**結果**：最終参加者は57名（介入群33名、コントロール群24名）で、独立性の検定を行い、両群の均質性を確認した。正規性が確認されなかったため、Mann-WhitneyのU検定を行った。群間比較において、看護師の問題解決行動自己評価尺度では、実施前と終了後の得点差で、【Ⅲ.問題の優先順位を見極め患者の要望に柔軟に応じる】(U=241.5, p=0.012)、【Ⅴ.患者が拒絶する援助を受け入れられるよう説得する】(U=226.0, p=0.006)、【Ⅶ.個別状況に応じて援助を工夫する】(U=214.5, p=0.003)、【Ⅸ.援助の効果を判定して支援する】(U=221.0, p=0.004)に有意差がみられた。看護実践における行為の振り返り尺度では、実施前と終了後の得点差で、第Ⅰ因子【患者・家族の意向の吟味】(U=238.0, p=0.010)、第Ⅱ因子【看護師の役割の認識】(U=262.5, p=0.029)、第Ⅴ因子【治療の状況の把握】(U=189.5, p=0.001)に有意差がみられた。成人用メタ認知尺度では、実施前と終了後の得点差で、【モニタリング】(U=161.0, p<0.001)、【コントロール】(U=164.0, p<0.001)に有意差がみられた。ラサター臨床判断ルーブリックでは、実施前と終了後の得点差で、【気づき】(U=246.0, p=0.013)で有意差がみられた。研修満足度は介入群が優位に高かった。

**【倫理的配慮】**予備研究2、3は京都橘大学研究倫理委員会の承認（承認番号19-35、19-58）、本研究は大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の承認（承認番号2021-18）を得て実施した。

**【考察】**測定指標の各時期における得点差の群間比較において有意差がみられたことから、本プログラムの有効性が示された。本プログラムは、学習の積み上げができる構成としたこと、ワークシートを用いた思考の整理、自身の思考に焦点をあてた振り返りを促したことによって効果が高まったと言える。プログラムの課題として、他者評価といった観点からクリニカルリーズニングの評価方法を検討すること、チーム医療に関する内容を含めたシナリオを作成することがあげられた。

**キーワード**：クリニカルリーズニング、経験2～3年を有する看護師

Kolbの経験学習モデル、プログラム開発

## 学位論文審査結果の要旨

経験2～3年を有する看護師を対象とした、クリニカルリーズニング力向上のためのプログラム開発とその効果の評価を目的とした研究である。準実験研究デザインを用い、介入群、対照群に割り付けてその効果を判定した。

**学術的重要性・妥当性** 経験年数2～3年を経た看護師は、所属部署での業務達成能力を有しているが、多様で複雑な患者のケアを計画したり調整したりするには至らない状態にあると言われており、その強化を図るためにはクリニカルリーズニング力に着目する必要がある、教育によってその強化を図ることが可能である。本研究では、クリニカルジャッジメント理論に基づいて教育プログラムが検討されている。今回の研究結果より、尺度スコア分析からも効果が検証できたため、有意義なプログラムであると判断できる。**研究計画・方法の妥当性** 研究デザインとして準実験研究デザインを採用しており、対象群との比較ができていたためエビデンスレベルが高い。対象者数も分析に十分集められている。効果判定についての結果が出ていることから尺度選定は適切であり、分析手法も適切である。**倫理的配慮** 予備研究、本研究すべてにおいて教育機関における倫理審査の承認を受け実施していた。特に再テストでは、協力の可否およびデータの連関に個人情報漏洩しないこと、研修という形はとっていたが、質問紙回答協力に関しては強制力が働かないように配慮されていた。コロナ感染拡大時期であり、最小限の対面の場に留め、オンラインでの参加も行えるよう配慮されていた。**研究の独創性あるいは新規性** 国内外の文献を精読し、臨床看護師を対象としたクリニカルリーズニングにおけるリーズニングパターンの活用を目指した教育プログラムはないことを確認した。プログラムは、事前学習の後に、第一回をシミュレーション、デブリーフィング、第二回を第一回の映像を確認しながらの臨床での活用状況についての振り返りという形で構成されており、反復効果が期待されるプログラムであり独創性が高いといえる。**論旨の明確性・一貫性** 予備審査で質問された内容については、最終試験で十分に修正・回答されており、研究方法、結果、考察における矛盾点はなかった。

以上のことから、本研究は博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと判断した。